

オピニオン

『現代医学』の歩み

山内一信*

はじめに

『現代医学』誌第1巻の発行(昭和25年11月30日)から73年が経過した。2020年からオープンジャーナル化が実現したという区切りの時ということで、『現代医学』編集委員として30年ほど関わってきた著者の経験から、その歩みについて述べる。これは著者の勝手な考えであるが、経緯を以下のように分けた。

- I. 1950～1973年の創刊時代
- II. 1974～1995年の成熟期
- III. 1996～2005年の変革期
- IV. 2006～2019年のIT化への助走期
- V. 2020年～のIT化の新時代。

I. 創刊時代：1950年(昭和25) 第1巻～1973年(昭和48)第23巻

『現代医学』の発行(昭和25年11月30日)に至る経緯は第1巻、第2巻の編集後記によると以下のようである¹⁾。当時、名古屋大学の久野寧教授が日本にはAnnual Review式の科学の進歩を表現する総説的な出版物がないのが遺憾だと慨嘆された。ところがそういう雑誌の出版社が戦後姿を消してしまった。そんな折、幸いなことに愛知県医師会会長絹川常二博士の持論である「医師会即医学会」の精神を実行するという決意のもとで『現代医学』が発刊されることとなった。当時、この出

版を後押ししていた学者は医師会役員はじめ日比野進教授、藤浪修一教授、八木國夫助教授らであった。その思想は、一地方雑誌の内容・外観でなく、全国的雑誌として羞かしからぬ高級の雑誌で、しかも一般開業医の方々に喜ばれるものでありたいとする気概溢れるもので、治療法ばかりに偏せず現代医学の傾向というところに中心を置く。しかし原著雑誌ではなく、テーマを定めて編集部からお願いする方針で行くとするものであった。

当時の編集への意気込みは日比野進編集委員の言葉にも表れている。「この頃ドイツの医学雑誌の戦後版を二、三見かけるようになった。そしてそれらの雑誌が普通の名前を持ち、普通の名前がかわらず堂々たる体裁と内容とを備えている事は、羨望に耐えないと共にアヴァンゲールへの郷愁にも似た感傷をさえ我々に感じさせる。それは日本の戦後の医学雑誌氾濫の渦の中にあるものの誰しも感ずるところではなからうか。そうした中であって愛知県医師会が何故『現代医学』を発刊したか。それにはこの雑誌の内容自身がこたえなければならぬ。この雑誌は、まず、ローカルの立場に立って、あらためてその立場を止揚し、世界の医学の進歩に相応し、この地方の医学に寄与するとともに、その視界をはなれ医学全体へ寄与するものであらねばならないであろう。こうした雑誌がこの地方に今まで一つもなかったことはこの地方の医学一般についていつもマイナスにはたっていた事は言うまでもない。編集同人は、雑誌に対する大きな抱負と愛知県医師会の権威と品位をいささかも損なわざらんことに努力している。」

当時の大項目は総説、臨床と研究、寄書、治療、

— Key words —
医師会即医学会, Web化, オープンジャーナル化

* Kazunobu Yamauchi: 東員病院・認知症疾患医療センター院長

臨床と病理, 予防医学, Note, 検査室に分かれていた。

II. 成熟期：1974 年(昭和 49) 24 巻～1995 年(平成 7) 43 巻

編集方針とその特徴は創刊時代のそれとほとんど変わりはない。編集方針は、(1)投稿原稿は受け付けない、(2)すべて編集委員会で最も適した主体を企画し、この地方で最も適した人に依頼する、(3)原著論文も掲載するが、新しい医学、新しい方法論、変貌する医学、医療を素早く紹介する、(4)温故知新も忘れず、総合的に編集する、(5)寄書欄(letter to editor に相当)を会員に解放する、と言うものであった。

後半の 10 年(1986～1995)も前からの伝統を受け継ぎ、大きな変更はなかった²⁾。愛知県医師会員を対象とするので、すべての専門領域をカバーするものであり、当地方の執筆者群の層の厚さを反映し、商業誌とは異なり、売れるための目玉的テーマにとらわれない「重要だけれども取り上げ難い」と言うテーマも多く取り上げられた。

III. 変革期：1996 年(平成 8) 44 巻～2005 年(平成 17) 53 巻

この頃は経済状況の悪化ということから、年 3 回の発刊が必要か、あるいは 2 回でもよいのではないか、そしてどの程度愛知県医師会員に読まれているのかなどが話題となった。冊子体の配布先は殆どが愛知県医師会員だけということで、かなり限定されるので、会員に内容を知らせるには『愛知医報』に目次だけでも掲載したらという議論があった。そんな折、メディカルオンライン社から論文別冊依頼を有料で配布業務を行ないたいとの依頼があった。理事会で認められることとなり 2002 年(平成 14)から電子配信が可能となった³⁾。オープン化についての反対議論もあったが、認められることはなかった。

IV. IT 化への助走期：2006 年(平成 18) 54 巻～2019 年(平成 31)年 67 巻

この頃から、愛知県内 4 大学の病院長が交代で

編集委員会をまとめるようになった。『現代医学』誌のあり方について、会員へのアンケート調査が行われ、廃刊はあり得ない、会員のニーズに添うように内容や構成を見直す、そして印刷・郵送にかかる費用を節約する等の課題について検討された。2009 年(平成 21) 57 巻から、年 3 回発行を廃止し、6 月と 12 月の年 2 回の発刊となった。さらに多くの内外の雑誌が Web 化されている状況ともあいまって、『現代医学』誌の Web 化が決まり、2014 年(平成 26)第 62 巻 2 号から冊子体を廃して、完全 Web 化へと方向転換した。日医会員のための電子書籍サービス「日医 Lib」に掲載されたが、アクセス出来るのは愛知県医師会員のみであった。

V. オープンジャーナル化の新時代： 2020 年(令和 2) 67 巻～

直江知樹委員長になって、『現代医学』を完全オープンアクセスとすることが検討され、2020 年(令和 2) 12 月発行の第 67 巻 2 号より愛知県医師会ホームページにてオープンジャーナル化となった。2019 年、2020 年、2021 年と本誌へのアクセス数を比較すると漸増ではあるが、明らかに増加している。ジャンル(項目)は座談会、特集、臨床トピックス、グラフ、オピニオンに整理された。

おわりに

『現代医学』が発刊されてから、既に 73 年になる。各県医師会が発行する学術雑誌で現代医学ほど継続して発刊されているものはない。論文内容をオリジナルとして求めるのではなく、あくまでも医師会員や医学界全体に役立つ視点を大切にしていることが続いて発刊されている理由の一つであろう。そう考えると世界にも発信する必要があると思われ、論文の要約を英訳することも良いかもしれない。この地域で学術の発展・発信に燃える医学研究者や医師、そして編集委員の意欲に期待し、さらなる本誌の発展を願う。

利益相反

本論文に関して、筆者に開示すべき利益相反はない。

文 献

- 1) 小林靖彦ら：愛知県医師会雑誌『現代医学』。愛知県医師会史 1979；3：908～913
- 2) 坂 行雄ら：『現代医学』誌の10年間。愛知県医師会史 1987；4：777～782
- 3) 川原弘久ら：『現代医学』誌の10年間。愛知県医師会史 2007；6：464～469